

C・S・ルイスとJ・R・R・トールキンによる革新に続いて、ファンタジーは児童文学を脱し、一般読者に向けて開かれていった。

想像が世界の意味を活性化させる力や、細かなデータ設定が現実を置き換える「第二世界」を作り出す可能性を受けて、さまざまな傾向の作品が生まれた。例えばアラン・ガーナーやサーザン・クーパーらの手法は、土俗ファンタジーだ。ケルトや古い英国の伝説を下敷きにし、現代の子どもたちが魔法使いマーリンに出会い、「アーサー王伝説」や「マビノギオン」の世界に誘われる。史跡や伝承、土地の記憶を通じて移行する欧州の土壌ならではのファンタジーでもある。

そこへ新たな米国の作家が参入する。ルイス、トールキンと合わせて三大ファンタジー作家と呼ばれるU・K・ルীগウィン(1929~2018年)は、SF作家として出発し、両性具有者の惑星を描いた「闇の左手」(1969年)で注目されていたが、トールキンの世界創造の手法を得て、ファンタジーのジャンルに進出した。もっとも有名な「ゲド戦記」(68~2

U・K・ルীগウィン「ゲド戦記」

無意識が見つけ出す物語

それは「無意識」である。それまでのファンタジーは「光」と「闇」の対立を骨子とし、宗教的な意味も含め、善悪二元論の様相が強かった。しかし、その定義では、現代の大人の文学として物足りないでもない。当時ユング心理学が台頭してきていたこともあり、深層心理や無意識が注目を集めはじめていた。



「わたしはプランするのではなく、潜在意識をきくって物語を見つけて出す」(「夜の言葉」、1979年)とルীগウィンは言う。真の物語は頭で作り出すも

のではなく、人類の古い集合意識から出てくるものだ。彼女は老荘思想にひかれていたし、両親が文化人類学者であったこともあり、「無意識」の根源的な力こそ、現代のファンタジーが、テーマとして見直すべきものだとした。

同書に面白い例がひかれていた。昔話には善悪の倫理はない。ただ「適切性」(appropriateness)があるだけだ。と。「ヘンゼルとグレーテル」のグレーテルは魔女のおばあさんをかまごに突き落として殺す。それは日常的な理性では容認できない行為だが、「心の深いところから来る象徴的な言語」に従っているのである。

その行為は、ユング心理学が唱える「元型」つまり世界各地の神話や昔話にあられる「大いなる母」「老賢者」また「影」などのパ

ターンが示している、個人の意志を超えた力だ。ルীগウィンは、ファンタジーの真の力をこの「無意識」の発見に見た。これを描き出すのがファンタジーの使命だ。彼女の主張はファンタジー界を揺すぶる、理性がワンパターンでこしらえあげ、当時市場を席巻していた「亜流ファンタジー」に警鐘を鳴らした。「ゲド戦記」の最初の3

巻は、(ここに)この「無意識」が世界を動かす、大いなる構造に焦点を合わせている。そして魔法使いとは、それに呑み込まれず、物事の「まことの名」を知って世界を導くものだ、という明快な中心原理を示した。「まことの名」とは古代部族の伝承にもあるが、記号的な通称名とは別に、「魂」「本源」そのものである。

湾を荒らし回る悪竜に對し、ゲドは古書からこの竜の「まことの名」を知り、それを連呼することで、相手を追い払う。一方、彼自身は自分に取り憑いた、名なき「影」には対処できずに苦しむ、ついにはその「影」におおのの名を与える(

とで、無意識の全に還る。こうした「まことの名」と「無意識」の相克は、現代人としての彼女に、徐々に葛藤を生みだしてゆく。2巻で大巫女に選ばれ「名を失った」ヒロイン、テナーに対し、ゲドは「個人の名前を取り戻せよ」とせまる。大いなる女神でいるのか、個人テナーに戻るのか。当時の女性解放運動も透けて見える。

環境破壊も題材に、4巻以降では、「まことの名」を操作することで世界を切り分けてきた魔法自体が力を失い、ゲドは無力な初老の男となり、テナーに庇護される。ジェンダー観の解体が早くも提示される。しかも、虐待を受けた最も無力な立場であるはずの幼女が、最後にゲドたちを救うのだ。彼女は竜の一族だった。竜とは人類に劣る存在ではなく、人類と同じ「まことの言葉」を持つていたが、人類はその言葉を支配と所有に費やし、竜は自由を選んで、本来の力を保ったのである。

知への過信が高じての環境破壊のテーマをへて、人間中心主義が、エコロジーの世界観に置換された。時代と伴走しながらシリーズを書き進んできたルীগウィンの変貌が鮮やかだ。(百合女子大学教授)